

# 波打つ風景の庭

Landscape Garden of Waves



八女市の特産品である八女茶は、後継者不足や若者のお茶離れといった課題を抱えている。本提案では、生産者と消費者を建築と風景を通してつなぎ、伝統を守りながら新たな可能性を生み出す架け橋となる空間を目指した。

既存の3つの倉庫に加え、新たに倉庫を増築し、イベントや体験会、試飲会の場として利用するとともに、展望台や休憩所を備えた交流拠点とする。屋根は茶畑の波打つ景観と逆の曲線を描き、「潮目」を生み出し、人々が集まる場をつくる。さらに敷地内にはカフェを設け、日常的に人が立ち寄れる居場所を形成し、道沿いに展望台へとつながる動線を設計することで、地域に開かれた循環的な体験を実現する。

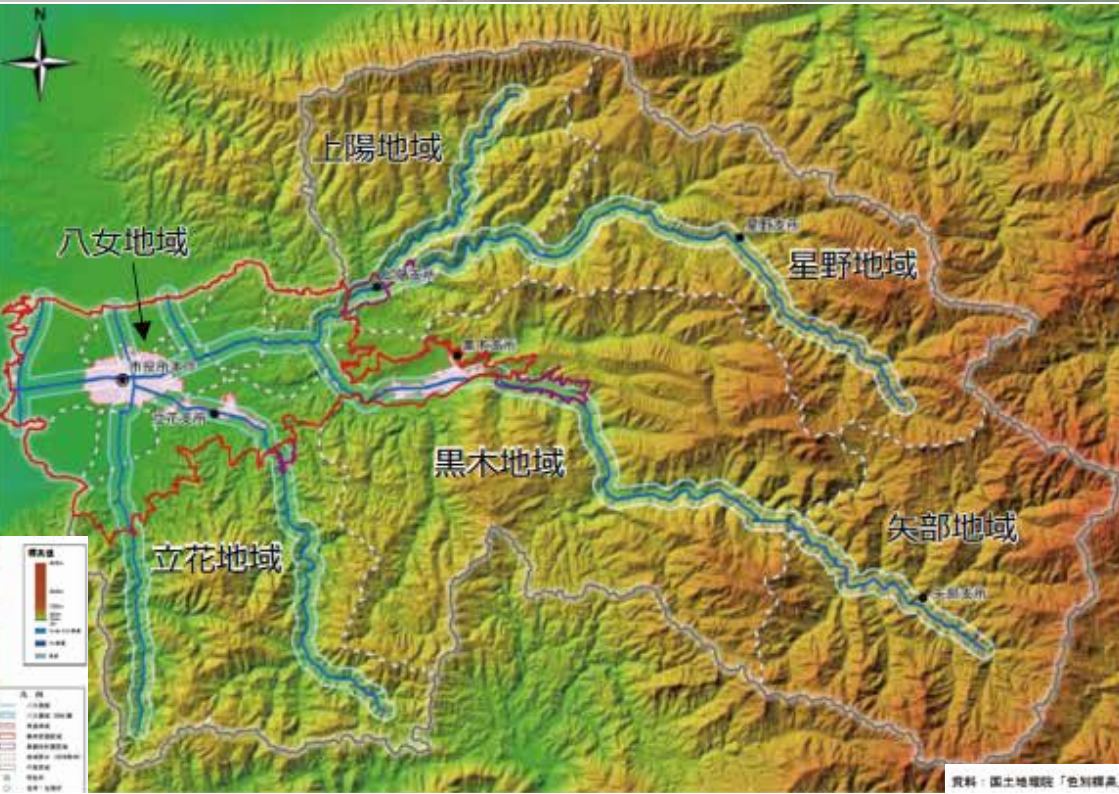


図1 八女市の地形

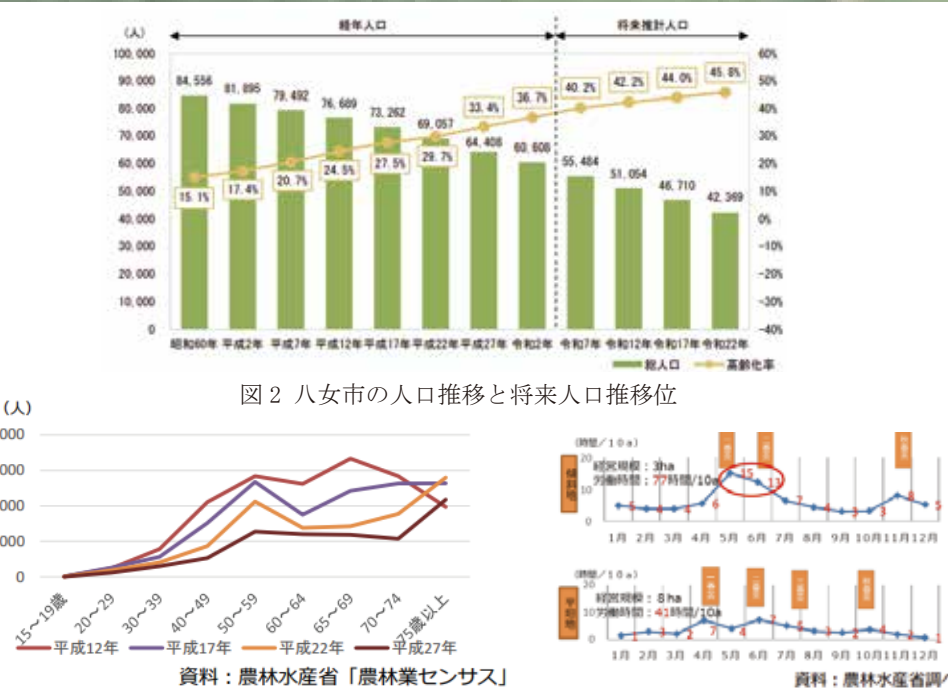


図2 八女市の人口推移と将来人口推移



図3 年齢別基幹的農業事業者数（工業作物）

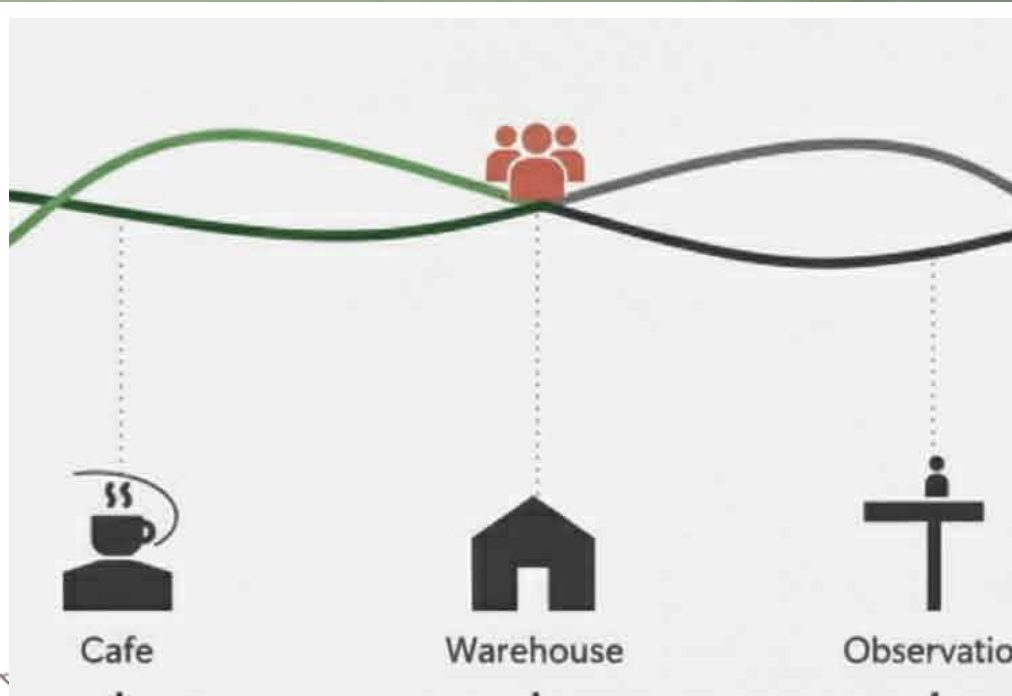
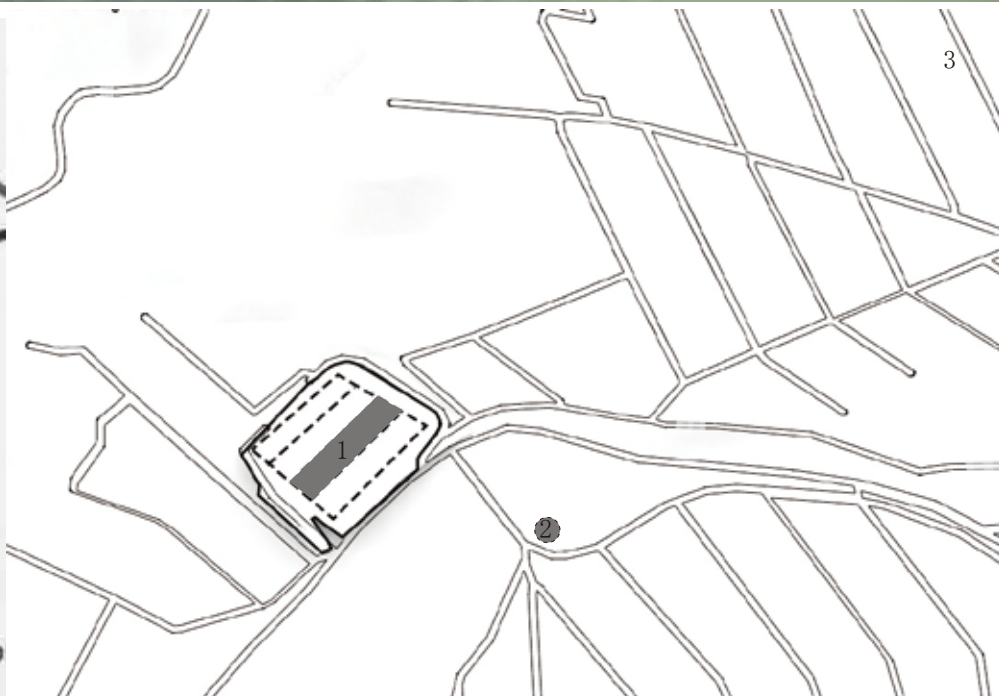
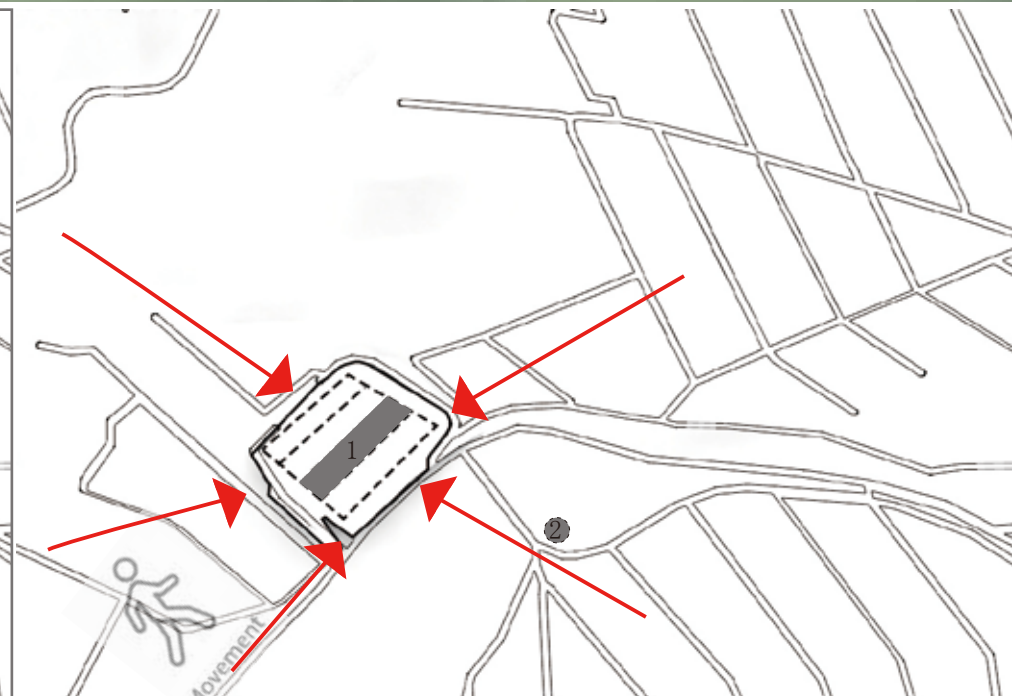
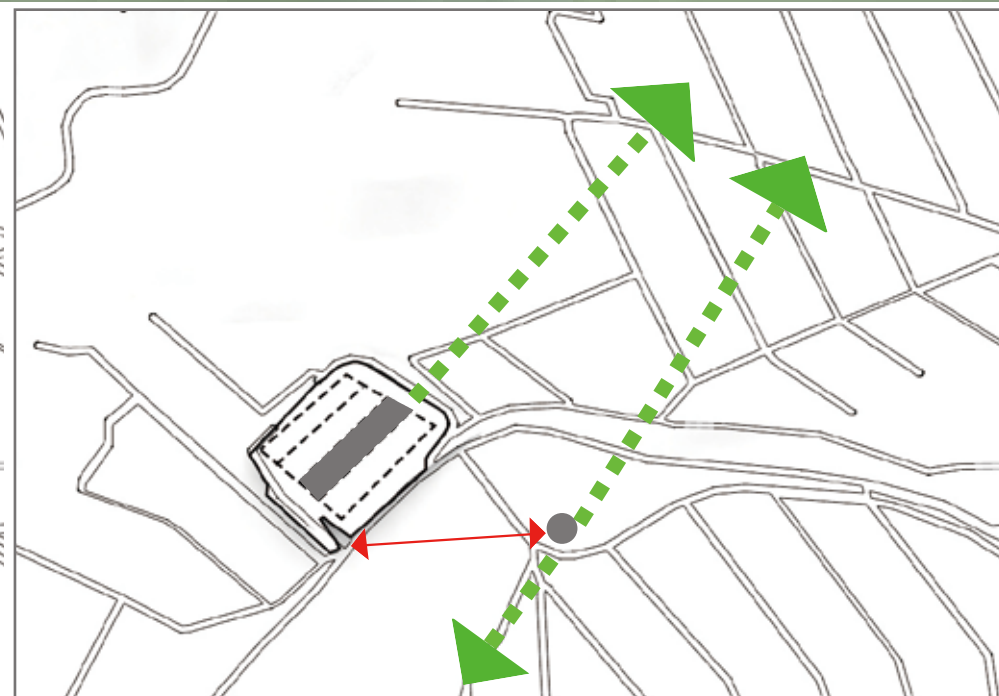


図4 労働時間の季節的偏在



1：新設倉庫と既存倉庫 2：カフェ・直売所

3：中央展望台



## 01 問題・課題

敷地は福岡県八女市、八女中央茶園に位置する。ここは全国的にも知られる高品質な茶の産地であり、特に八女玉露は国内で最高峰の評価を受けている。広大に広がる茶畑は地域の風景を象徴する存在であり、地元の産業と文化の基盤となっている。

この地の特徴は山間地特有の地形と気候にある。昼夜の寒暖差が大きく、それが茶葉の旨みを引き出す環境をつくり出している。豊かな自然と人々の営みが重なり合うことで、八女の茶文化は長い時間をかけて磨かれてきた。

## 02 問題・課題

八女茶の茶産業は、現在大きな転換点を迎えている。生産者の数は年々減少しており、特に小規模農家の廃業が目立つ。さらに担い手の高齢化が進み、その半数以上が高齢層に偏っていることから、若手不足が深刻な問題となっている。繁期には派遣やアルバイトの募集が行われているが、長期的に定着する例は少ない。その背景には、労働の実態と人々が抱くイメージとの間に大きなギャップがあると考えられる。それが若い世代を遠ざけている要因だと考えている。

## 03 ダイアグラム

- 茶畑の波打つ風景
  - 正面に広がる茶畑が「波打つように連なる」特徴的な地形を生かし、建築の屋根をその逆の波で表現し、潮目（対流）が生まれる。
- 潮目が人を集める場になる
  - 自然の波（茶畑）と人工の波（屋根）が交差する地点に、人の流れ・視線・活動が集中し、そこで「交流」「体験」「休憩」が起こる。

## 04 敷地と計画動線

倉庫とカフェ・直売所の距離を近くに設定しているため、スムーズに観光客が行き来できる同線計画にしている。計画対象の倉庫内では、実際に作業が見れるようにしたり、生産者のコモンスペースとなっているので展望デッキへ行く際などに、生産者と観光客がすれ違う（出会う）確率を上げ、両者との距離を縮める動線計画にしている

## 05 敷地と計画対象

既存倉庫に新設倉庫を増築させることによって、中央展望台から見える茶畑の風景を妨げずに景観との調和を図っている。さらに新設倉庫に隣接してカフェを配置することで、作業と交流を結びつけ、訪れる人の動線を自然に導く。倉庫群の活動と日常の憩いを連続させることで、産業と生活が緩やかにつながる構成にしている。

## 06 将来

本計画の実施により、現地でのイベントや試飲会の開催が可能となり、観光客の増加が期待できる。また、体験会の実施によって地域との交流が深まり、参加者に魅力的な体験を提供できる。さらに、アルバイト希望者向けの説明会では、実際の作業風景を見学できるため、仕事内容を具体的に理解しやすく、入職後のギャップを軽減できる。その結果、早期離職者の減少にもつながり、安定した人材確保が実現できると





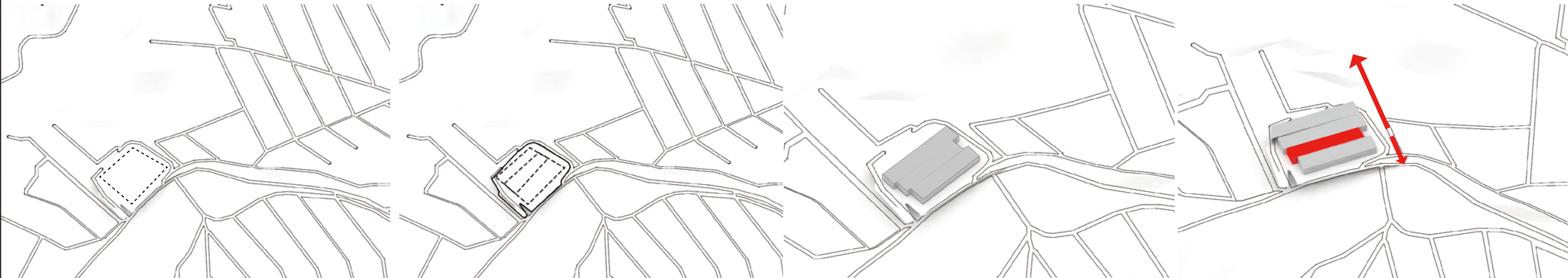
新設展望フロア



イベント時内装



通常時内装



<p>01 既存の倉庫と茶畑の景観</p> <p>「既存の風景の尊重」：広大な茶畑の中に、3棟の既存作業倉庫が点在する美しい風景。 この景観を「壊すことなく」、新たな機能を付加することが計画の根幹となる。</p>	<p>02 新建築物の配置検討（景観への配慮）</p> <p>計画の方向性： 新規建築による景観破壊を避けるため、既存の倉庫群の間の空間に着目します。 既存の建物の高さやボリュームに調和する形で、新建築の配置領域を特定します。</p>	<p>03 既存倉庫へのアプローチと連結</p> <p>構造的な工夫： 3棟の倉庫を、新設する空間で緩やかに連結する計画。 これにより、倉庫が持つ歴史的・構造的なアイデンティティを保ちつつ、動線を確保する。</p>	<p>04 景観への貢献</p> <p>新設された空間（赤色で示唆）は、周辺の茶畑を遮ることなく、むしろその美しい眺望（展望台）を取り込む。 季節ごとのイベント（イベント会場）や地域の集いの場として機能し、風景の「価値を増幅」させる建築へと生</p>
--	---	---	---

屋根は「潮目」をモチーフにする。茶畑の緩やかな傾斜に対して、逆方向の波形をぶつけることで、その間に“出会いの場”を生み出す。潮目に魚が集まるように、人が自然と集まる風景をつくる。

屋根の下には八女市の伝統工芸品である竹籠をイメージしたルーバーが広がり、光が編み込まれたように室内に落ちる。光は床に反射し、時間帯によって異なる表情を生む。

内部は、一直線に伸びるランウェイのような空間。その上に、それぞれ異なるレベル差をもった（最高高さ400mmに合わせることもできる）床を設けている。そこは試飲、イベント、休憩スペースとして使われる。それらは、壁で区切るのではなく、茶畑の道のように自然に分かれていく。腰掛けられる高さの段差は、滞留や交流を誘発する。





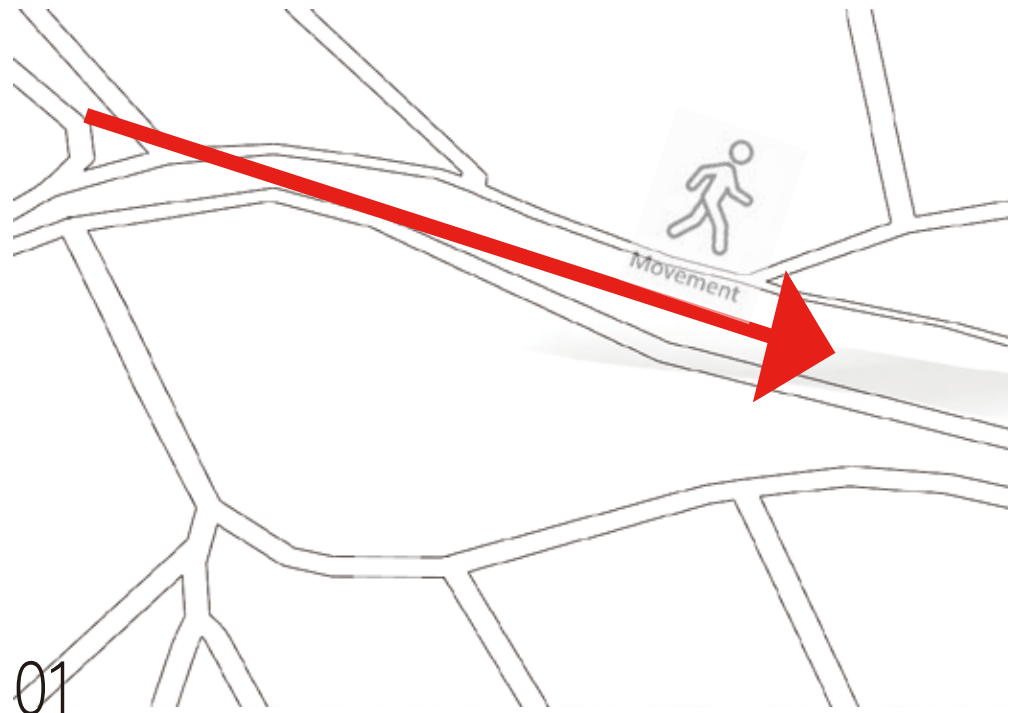
カフェ外観



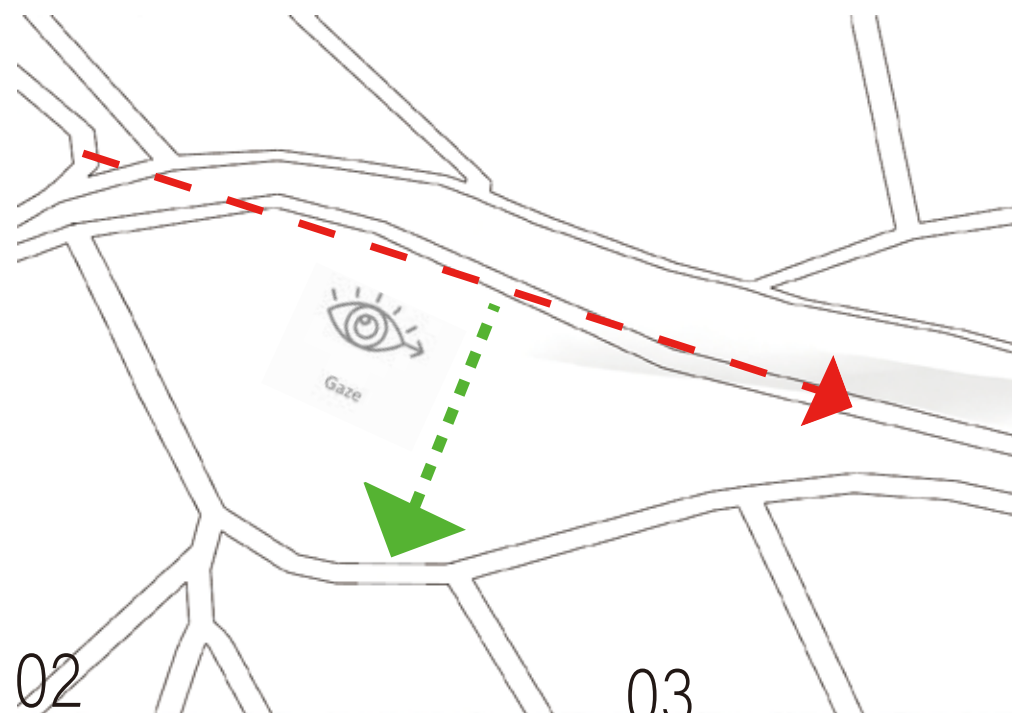
カフェ内装



通路



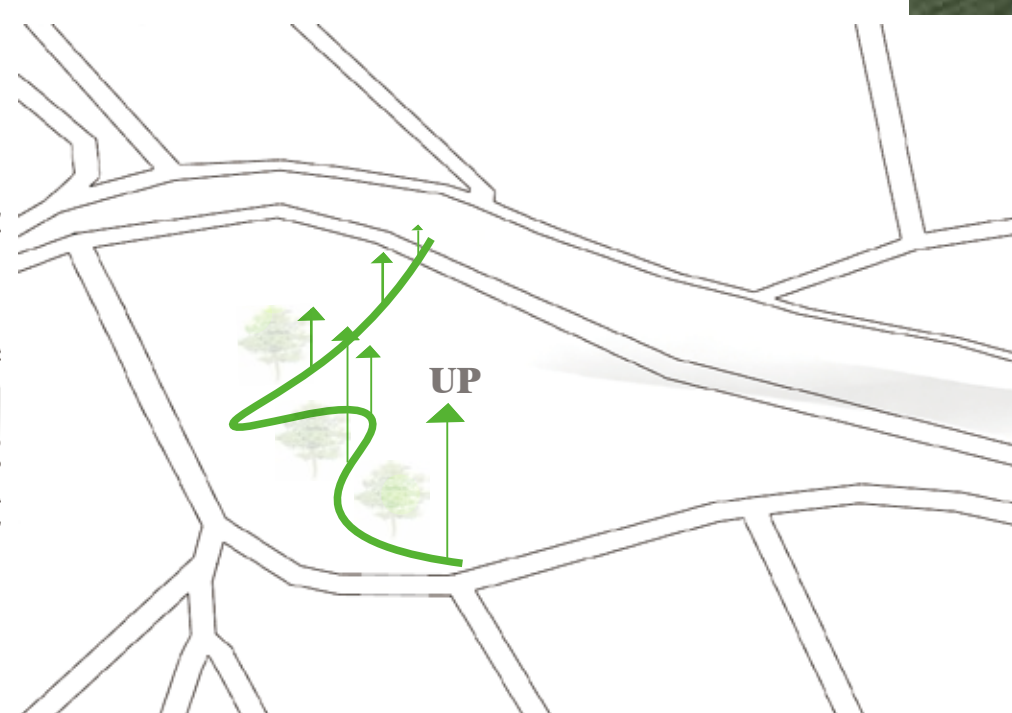
01



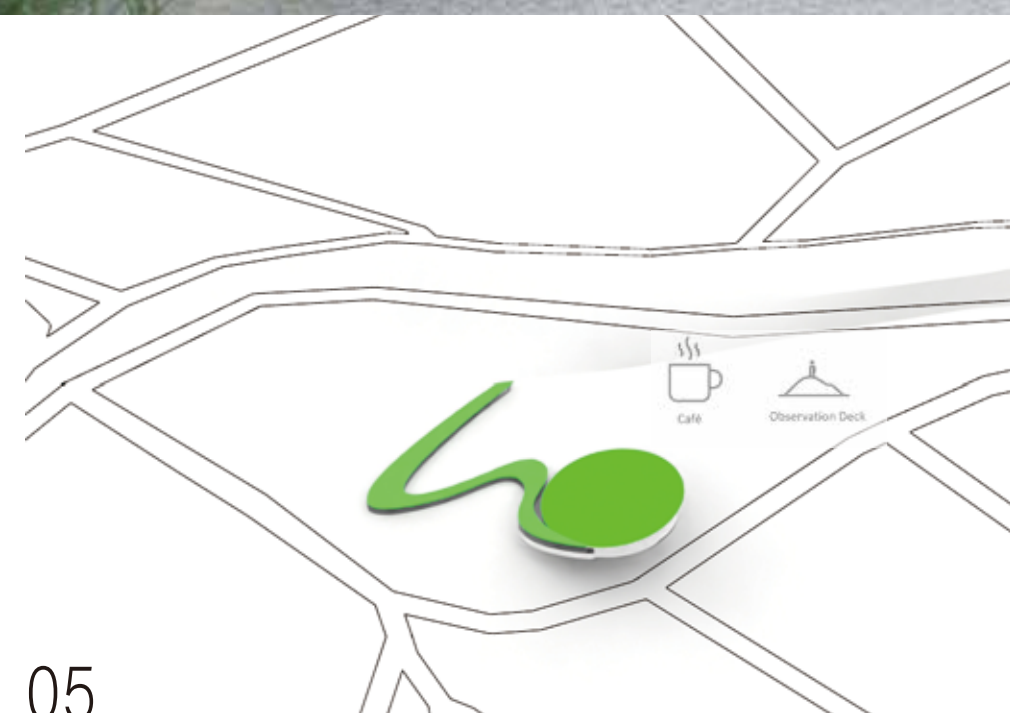
02



03



04



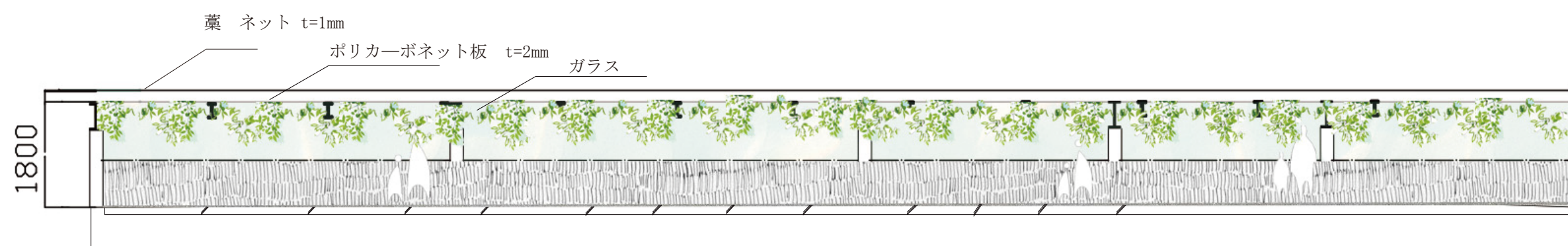
05

01. 丘へと伸びる一本の道が始まり。
02. 途中で視線は茶畑へと抜け、風景に溶け込む。
03. そこに潮目が立ち現れ、道は持ち上がり空間を生む。
04. 潮目の中で人が立ち止まり、光と影が重なり合う。
05. その先にカフェがあり、人々は集い、新しい風景を形

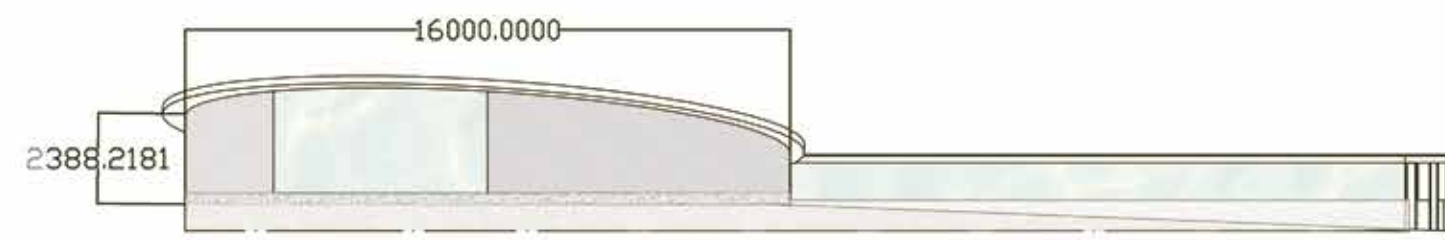


図5 藁ネットと生産者

カフェの通路（潮目）の屋根には、八女茶の高級品種「宝玉」を栽培する際に用いられる、直射日光から茶葉を守る藁のネットを使用している。そこを通る人々は、自然な木漏れ日の光を浴びながら奥へと進むことができる。通路は単なる移動のための道ではなく、通路は単なる移動のための道ではなく、生産者にとっての日常と観光客にとっての不思議な体験をつなぐ、曖昧で独自の建築空間として計画した。



東側断面図 1/200



西側立面図 1/200

出典：図1.2.3.4 第二章 八女市の現状と課題

<https://www.city.yame.fukuoka.jp/material/files/group/1/20220419genjyoutokadai.pdf>

図5 グラフふくおか

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/somu/graph-f/2023autumn/special/index.html>